

# OB紹介



(株)進研アド  
山口 哲郎さん  
(平成16年度入学生)

## —仕事内容を教えてください。

私は、進研アドという会社で、営業の仕事をしています。簡単に言えば、大学の学生募集広報のお手伝いですね。具体的には、高校生を対象にした大学の情報誌や、大学案内、電車の車内広告や、テレビCMの作成を担当しています。毎日、大学に営業派遣に行つて、高校生が今求めているものや、他の大学がどのような打ち出し方をしているかといった情報を伝えて、大学側が求める学生にフィッとした広報戦略を提案していきます。

また、広告を作る際には、学校側の思いを汲み取ったものに仕上がるように、カメラマンやデザイナーや印刷会社に指示を出す、ディレクターの役割を担います。大学の良さを高校生にどう伝えるか、高校生から大学の良さをどう気づいてもらうか、ということに尽きますね。

## —現在の仕事を選んだ経緯を教えてください。

私は、環境問題をしたという漠然とした思いから、総科を受験しました。総科で四年間学んでいく中で、他学部の専門科目も履修していったら、いろんなことを幅広く学び、自分が知らないことがたくさんあることに気づきました。このことに高校生の時に気づいていたら、もっと充実した四年間が過ごせたのではないかと思います。

そこで、自分のできなかったことを、今の高校生に伝えられる仕事をしたという思いで、就職活動をしました。教員免許は取らなかつたので、予備校やベネッセを志望していたのですが、残念ながらベネッセには落ちてしまいました。その時に、進研アドというベネッセグループの会社を知りました。広告を通して教育を伝えられるって面白いな、と思つて

この仕事を選びました。

## —仕事のやりがいについて教えてください。

どんなことにも通じると思うけど、仲間たちと時間をかけて作りあげたものが高校生に届く、自分が携わったものが商品として世の中に出ていく、というのが一番の魅力で、面白いところでもあります。それから、企画をプレゼンテーションして、仕事を勝ち取るというのやりがいです。全国を転々とできるから、その先でおいしいものを食べるという楽しみもあります(笑)。

## —総科を選んだことをどう思っていますか。

大学の四年間という時間のある時に、自分の狭い視野を広げて、他の学部もじっくり見ることができました。その中で、自分のやりたいことを改めて考えることができたのはよかったです。それから、総科にはいろんなことに興味を持つている人が集まってくるので、そういった人達と話をし、友達になれるのはいいことだと思えます。自分の進路を決める際に、良い刺激になりました。一方で、深く学ぶことが出来ないから、納得できない人

もいるかな。そういう人は、大学院に行けばいいのだけど……。僕は、大学院には行きませんでした。就職に求められているのは、その研究を極めていくことではなくて、その過程で培った力だと思っただから。

僕は、横藤田先生という障害法学の先生のもとで卒論を書いたのだけど、当時の環境共生科学プログラムは、文系も理科も一つにまとまっている不思議なプログラムで、いろいろな先生の話を書くことができました。また、横藤田先生のアドバイスで、社会福祉の先生にも話を聞く機会がありました。いろんな分野の人と意見をぶつけ合うことで、自分の意見もすっかりしていき、他の人の意見のいい所を取り入れながらも、悪い所はきちんといい返せるようになりました。

―卒論の研究内容について教えてください。

一・二年生の時は環境問題について学びたかったので、生物学実験や自然環境実習などの授業を取っていました。また、文理融合が総科のモットーなので、社会福祉や社会環境演習のような社会学の授業も履修していました。そして、その時たまたま横藤田先生の『ブラックジャック

クによるしく」というマンガを題材にした授業に出会いました。それは、重い障害を持って生まれてきた子供を治療し生かすべきか、治療をせずに死なせてあげべきかを考えるもので、非常に深いテーマで、強い感銘を受けました。そして、それまでは理系でやってきたのですが、最終的に横藤田先生の研究室に行き、このテーマで卒論を書かせてもらうことになりました。

卒論を書くにあたって、実際に障害を持つているお母さんに話を聞いたり、他の大学の先生とメールをやり取りをしたりしました。その中で、治療拒否という考え方が生まれたのですが、ここで一番問題なのが、子どもの意思がわからないという事です。たとえ親であれ、人の命を絶とうとしているわけだから、虐待にもなりかねないわけだし……。そうしたときに、医師の判断で決めてしまってもいいのかというと、それも非常に難しい。また、子供のQOL（生命の質）の観点からも、生きていく方がいいのか悪いのかを考えてみるなど、深いテーマについて、色々な人から様々な事を聞きながらまとめ、自分なりの卒論を完成させました。

―サークルは何をしていましたか。

大学のサークルは二つ入っていました。ひとつは一年生の時から入っていた「エメロード」という野球サークル。これは、文学部三年生の先輩四人が作った十五〜二十人くらいのサークルで、たまたま入ったという感じでした。一年生もすぐ仲が良くて、野球はもちろんのこと、プライベートでもよく遊びました。ただ、このサークルはちよつと変わつたサークルで、サークルなのにもかかわらず、東広島野球連盟というところに登録して、社会人の野球クラブに混ざつて試合をしていたんですね。大会を勝ち抜くために、週三〜四回練習していました。一度、東広島のトーナメントを勝ち抜いて、優勝したのは楽しかったです。いい仲間巡りに巡り合えたかなと思つています。

もうひとつは、こどもクラブというサークルで、平日は週に二回、放課後に活動するのと、土日は小学校とかに行つて、紙芝居とか踊りを一緒にして、小学生と一緒に遊ぶというサークルでした。子どもと遊ぶので、無心になれるというのが楽しかったです。こっちはエメロードと違って、それなりの伝統があるクラブで、そのバランスもちよつと面白かつたかな。

—将来の夢・目標を聞かせてください。  
ひとつは、この間結婚式を挙げたので、奥さんを幸せにするというか、良い家庭を築いていければなと思っています。そして、良い家庭を築いていくためにも、自分が良い仕事をしないといけないのだなと感じています。

もうひとつは、でっかい仕事をしたいたいということですかね。会社の中でも、どんどん上に昇っていきたいし、大きな仕事も、自分が納得できる仕事も増やしていきたいです。今、自分が出来ていないところを出来るようにして「ああ、いい仕事をしたな」と思えたらいいなと思います。お客さんから「いい仕事をしたね」みたいな声をもらえるように、仕事の質を高めていって、それがゆくゆくはでっかい仕事につながると思っています。

今、目指しているのは、億単位のプロモーション活動を提案して採用してもらうことです。例えば、大学案内や交通広告をこういうデザインで統一していきましようといったような、トータルした大元の提案をして、採用してもらうのが夢です。

—総科生にひとことお願いします。

自分からどんどん積極的に動いてほしいし、いろんな人と交流して人脈を広げていってほしいです。高校までは県内の友達に限られていたと思います。しかし、大学にはいろんな人が集まってきて、そこからいろんなところに散り散りになっていくので、そういう人たちとつながっているというのは、考えている以上に大きな財産になると思います。世界は自分が思っている以上に広いので、どんどん足を動かして、今の自分よりもっと大きく成長できるように、積極的に動いてほしいです。

【担当】

24生 上野 祐介  
24生 岡添 りえ



# OG 紹介



TSS テレビ新広島 報道制作センター 記者  
竹下千晶さん  
(平成 16 年度入学生)

## — 仕事内容を教えてください。

警察担当の記者をやっています。県庁の記者クラブにいて、警察署を回ったりして情報を探しています。人のところに通って仲良くなってヒントをもらうので、話すことが好きな私にとっては天職ですね。主には取材をして、原稿を書いています。主にはリポーターをやったりもしています。土日に関係なく仕事があつて、夜中に全国中継をすることもあるので大変ですが、刺激がたくさんあるので、この仕事を初めて三年間辞めたいと思つたこ

とはないですね。

## — 現在の仕事を選んだ理由は何ですか。

もともとは、人に何かを伝えたいという思いから教師になろうとしていました。学生の頃にカンボジアに行ったのですが、カンボジアから帰国して、母校でカンボジアについての授業をしたんです。そのときに、生徒からの感想文の反応が色々あつて嬉しかったんです。自分の経験を人に伝えて、その人が次の行動を起こすと決めたときに、初めてボランティアが自己満足の域を超えるんだと感じました。それがきっかけで伝えることがおもしろいと思うようになって、マスコミを目指しました。

## — 仕事で気をつけていることを教えてください。

実名報道は特に気をつけています。名前を出すと、取材対象の人を社会的に殺してしまうこともあります。どこまで人を傷つけない報道をできるかは意識していますね。でも真実はちゃんと伝えたいので、どこまでプライバシーを守るのかの兼ね合いが難しいです。あと、先輩には「ありがたいと言われる取材をしなさい」と言われています。

## — 今後の仕事での目標は何ですか。

TSS のニューヨーク支局で働きたいです。9・11 にあわせて先輩とアメリカに行つたんですが、普通の人が入れないところに入れてもらえたりして、事件について知らないことや新しい発見がたくさんあつてとても刺激的でした。

## — 学生時代の専攻を教えてください。

私は、当時環境共生科学プログラムに所属していて、卒業論文は佐々木宏先生の下でカンボジアにおける初等教育を研究しました。当時、カンボジアは発展はしていましたが、教育面はまだまだで、まずは幼稚園教育から改善するべきだと考えたので、それがどうなっているのかを調べました。カンボジア政府の取組みについて調べ、どんなバランスが良いのかを考えました。実際に自分が赴いた経験や、青年海外協力隊に行かれていた人の話を聞いたり、早稲田大学で研究されている方の論文を探したりと、すごく大変でした。私は、環境共生科学プログラムに所属しながらも、英語の教員免許を取るために、単位の上限をはずして週に三十一コマとか三十三コマとかいったコマ数を入れていました。単位が多かった

し、しかも私は自宅生で通学に時間がかかったので、とてもしんどかったですね。

### ―大学生活の思い出を教えてください。

勉強でもサークルでもなく、カンボジアに一人で五回行って、そのうち一回は現地に住んだことですね(笑)。高校二年生のときに、カンボジア出身で、地雷で両足をなくされた方の話を聞いたことがきっかけでカンボジアについて勉強し始めました。また、一方でカンボジアの子どもたちが、貧しくても幸せに暮らしているのかというところについて聞く機会が多くあり、いつか見に行つてやる!と決めたんです(笑)。初めてカンボジアに行つたのはスタディツアーの一環でしたが、そのときに私は、「ここに長い間住まないといけない、ここにやりたいことがあるかもしれない」と思いました。そこで、私は大学を一年間休んで、そのうち半年間は働いてお金を稼いで、残りの半年でカンボジアに行きました。ただ、両親の説得に一年半くらいかかったんですよ。一人暮らしや外泊も許されていなかったから、カンボジアに単身で行くなんていったら、両親が大反対で……。日本よりも危険だとされる場所に行くのに、「心配しないで」なんて、両親の気持ち

も考えず、ずいぶん自分勝手だったなあとは今も思います。そんな風に、私の学生生活で印象に残っていることは海外に行きまくったことですね。あとは、宮島キャンプが私の代から始まって、その代表を友達とやったこと。今でも続いているなんて嬉しいですね。ただ、大学生にしかない日常をもっと大事にしておけばよかったかなと思います。総科バレーにも所属していましたが、ほとんど行けなくて……。朝まで騒ぐとか、今から飲みに行こうって誘いに乗ったりとかをもっとやっておけばよかったと思います。一年卒業が遅れたので、総科バレーの同級生の追い出し会ときに、私は寂しくてすごく泣いてしまったけど、来年、同じように泣けるのかなと思つてへこみました。私は、サークルではなくてサークルの友達に思い入れがあったけれど、彼女たちはサークルそのものにも思いを感じていたんだなと思います。

### ―総科生にひとことお願いします。

私自身が高校時代から思っていることです。何事にも妥協しないということ。辛かったら泣いてもいいし、ぼろぼろになってもいいから、自分の好きなこと・人・物には妥協して欲しくないで

すね。アルバイト先で少々辛くても、腹が立つても辞めないことです。あとは親に余りお金を借りずに頑張つて欲しいですね。親にお金を借りると簡単に何でもできてしまうので。もちろん出してくれるのであれば存分に甘えてもいいと思いますが、自分で稼いで頑張つたからこそ達成感を得ることができるのは大きいです。そして海外に行つて欲しいです。単純に面白い人との出会い、自分や日本、広島を客観的に見て考えるチャンスです。から。社会人になったら長期の休みは取れないから、大学生のうちにお金を借りてでも行つてください(笑)。私が後悔していることとして、両親や祖父母をもっと省みればよかったということがあります。「お金以外で自分が親に返せるものはなんだろう?」って考えてみたり、家族を大事にして欲しいですね。あとは学生時代にしかできないことを存分に楽しんでください。

### 【担当】

24生 藤本 迪子  
24生 安田 香穂